

「そういえば春貞さま。あなたがいつも丸腰でおられるのは究極の活人剣のおつもりだと言われましたね」

幸江も剣術の話題ならついていけた。

「ああ、言ったな」

「得田殿とかいわれる方をお守りした際にも丸腰で相手の剣を奪われましたが、あれが無刀取りですか。柳生新陰流の奥義と聞き及んでおりますが」

幸江は先般目の前で春貞が相手の刀を一瞬で奪った動きを思い出しながら聞いた。

春貞は難しい顔をしたものの、しつかりとした口調で答えた。

「いいか。無刀というのは些か誤解されているようだ」

「誤解、ですか」

「そうだ。無刀とは、かならずしも相手の刀を奪うという技ではない。さらにいえばだ、奪って見せて『どうだ凄いだろう』と威張るものでもない。

本当の所は自分に刀がない時でも相手に斬られないというのが無刀だ、と俺は思っている。

ただし、家伝書無刀之巻には『無刀は当流にこれを専一の秘事とするなり』とあるからして俺などはまだまだ入り口を知ったに過ぎん」  
そんな話しをしながら歩いて来たが、雨は小降りになって来たもののまだ止む気配はなかった。

「おつと、昌平橋だ。腹が減ったならこの先には飯屋も多い。どこか寄つていくかい」

春貞が笠を上げ、周囲を見回しながら気を遣った。

「私は大丈夫です。昼は抜くことが多いですから」  
そう答えたとき、前方から楊枝を啜えただらしなない風体の男二人が立ちふさがった。

「おう、こつちは女の二本差しかい。真つ昼間から見せつけてくれるじゃあねえか」

酒でも入っているのかからんできた。

この辺は小石川あたりとは違い人通りも多く、橋幅の狭い昌平橋を行き交う

人々が心配そうに足を止めた。

無頼漢の一人がにやつきながら幸江に一步近づいた刹那、幸江の左手が刀の鞘ごと突き出され、柄頭が男の鳩尾みそおちに吸い込まれた。

声も上げずにくたくたと崩れ落ちた仲間を見て相棒が逆上し隠し持っていた匕首を抜きつつ春貞を睨んだ。

丸腰の春貞の方が御しやすいと見たのか、

「やい、兄さんこの礼は高くつくぜ」

と匕首の刃を上にし両手で腰だめにした。

見物人たちは匕首を見て声にならない悲鳴をあげたが、春貞は傘をさしたままにここにこしていた。となりの幸江も男を注視するより春貞がどう動くのかを見上げていた。

「弱い奴ほど刃物を見せたがるものさ」

男が勢いよく体ごとぶつけるように突いてきた。

傘が開いたままふわりと宙を舞ったと思つたら、男の刃先を寸毫右に交わした春貞の両手が男の手首にかかった。

途端、男の手から匕首が飛び悲鳴があがった。

手首の骨が折られたのだ。

舞った傘がこれまたふわりと落ちて春貞の手に戻った。

橋の上でどうなることかと思守っていた人たちから歓声があがった。

痛さにのたうち回る男をそのままにして春貞は、

「これで当分悪さはできねえだろう」

と呟きながら幸江に、

「いこうか」

と傘を向け、優しい言葉をかけた。

春貞が向かった先は日本橋富沢町裏通りにある音曲の師匠宅だった。よく磨かれた格子戸をがらりと開けると障子ごしに三味線の音と共に粹で涼しげな声が聞こえた。

「咲いた桜に

なぜ駒つなぐ」

「ごめんよ。おつしよさんはいなさるかね」

春貞が声をかけた。

唄が止み、

「あら、春さんかい。中に入ってしばらく待っておくれ  
何とも艶っぽい声が響いた。」

「駒が勇めば

花が散る」

と師匠の声に合わせるように男の声が重なった。

ここは小唄(端唄)を教えるお吉の家なのだ。

春貞と幸江が二畳ほどの狭い待合部屋で座っていると、

「おつしよさん、ありがとうございます」

と身だしなみが行き届いた若い男が出てきた。その背に、

「若旦那、次までもそつとさらつといてくださいまし」

と言われた男はばつの悪そうな顔をしながら出ていった。そして、

「春さん、お入り下さい」

三味線を爪弾きながら美声が響いた。

「ごめん」

春貞が障子を開けるとそこは四畳半ほどの狭い稽古場に路考茶ろこうちやか、渋い小袖に吉弥きちや結びの帯が粋な、そして抜けるような肌の白い女が三味線を携えて座っていた。

後ろから入ってきた幸江を見て、